

平将門
その真実

塩野
博

青山ライフ出版

はじめに

平将門は平安時代中期の武将であるが彼の死から千年以上経過した。「人の噂も七五日」ということわざがある。大抵のことが起こっても人々は七五日も過ぎれば忘れてしまうのだが、将門はその死から約千八十年経過したが未だに忘れられていない。各地に将門を祀つてある神社や首塚が多数ある。

例えば東京都千代田区にある将門の首を埋めたとされる首塚・神田明神・築土神社・等、茨城県では将門の三女如藏尼が、将門の三三回忌にあたる九七二年二月（天禄三年）にこの地に戻り、付近の山林にて霊木を得て、将門の像を刻み、祠を建て安置し祀つたのがはじまりとされる国玉神社があり、首の無い将門が埋葬された延命院の将門の胴塚、及び将門が戦死した古戦場の跡とさる北山稲荷大明神などがある。

千葉県柏市では将門の三女如藏尼が父の霊を祀つたのが始まりとその名もずばり将門神社があり、この社殿には精密な将門の紋である放れ駒等の木造の彫刻がある。我孫子市には将門神社と手賀沼をはさんだ対岸に日秀将門神社がある。

その他戦国時代に千葉氏によって建立されたといわれる佐倉市の将門山大明神等がある。

東京都西多摩郡にも将門神社があるが将門の子の良門が亡き父の像を刻んで奉ったのに始まる。栃木県では将門が討たれた時、腹が飛んできたといわれる足利市の大原神社・手が飛んできたといわれる大手神社がある。埼玉県は幸手市には将門の愛馬が将門の首をくわえて運んできたという将門の首塚がある。福島県浪江町にも将門を祀った国王神社がある。

京都にも将門が晒し首になった場所に京都神田明神がある。東京の神田明神や将門の首塚は毎日参拝者が絶えない。

なぜ人々は千年を経過しても将門を崇敬しているのだろうか。関東大震災後および太平洋戦争後には東京都千代田区の首塚に崇りがあった。その崇りは現在も恐れられている。なぜ千年以上も経過しているのに崇りがあるのだろうか。将門の人物像は『将門記』に書かれているが、実際の将門は『将門記』の内容と大きく異なるのではないだろうか。

歴史は勝ち残った者が創る。『将門記』は勝った平貞盛等が創ったもので自分の都合のいいように書かれたものである。将門は新皇と称したこともなければその茶番劇も無かった。将門を天皇にとって代わろうとした悪人であるとしたのは平貞盛等である。

『将門記』を何度も読み返すと多くの誤りに気がつくだろう。例えば平良正との川曲村の戦

いで将門の父平良将が出てくるのは間違いである。又平良兼が死んだことが二回出てくる。同じ徐目のことも二回出てくる。時間が逆戻りしているのも二箇所ある。良兼が最初に死んだと記されている時および川口村の合戦の時である。将門の弟の平将頼については徐目で下野守に任命したとき舎弟と言っていたが殺害されたとき長兄となっている。まるで作者自身が一回も読み返していないように思える。なぜ『将門記』このような単純ミスが多くあるのであろうか。それは作者及び書かれた状況にある。

『将門記』はまだ将門の残党狩が厳しく行われていたとき密かに、かつ短期間で急いで作成されたものである。また作者はある事実を隠すためフィクションを挿入している。また平安時代は呪術が非常に盛んであった。将門の死に呪術は大きく影響したと思われる。本書はこれ等を仔細に解析し謎を解明して、「平将門の真実」に迫るものである。

なお本書に用いた『将門記』の口語訳は主に梶原正昭氏の『将門記』を使用した。

平将門 その真実 目次

はじめに 3

第一章 将門の胴塚、首塚について 10

第二章 『将門記』(将門合戦章)について 18

第一節 『将門記』(将門合戦章)とは何か 19

第二節 『将門合戦章』のあらすじ 20

第三節 『将門合戦章』の明らかに間違っている部分及び意味不明の不思議な記述 29

第四節 『真福寺本』の誤り 53

第三章 『将門合戦章』の作者と筆者 59

第一節 『将門合戦章』の作者が貞盛である理由 64

一 貞盛の感情表現が多い 64

二 「彼の君」 78

三 「本位ではない」 78

四 弓袋山がでてくること 79

五 貞盛の妻について 80

六 貞盛の悪口が書かれていない 81

七 『将門合戦章』の写本が名古屋の真福寺にあったこと 82

第二節 『将門合戦章』の筆者が京都の貴族であるという理由 83

第三節 貞盛が筆者に依頼した内容 87

第四章 将門は新皇と称したことは無い 93

第五章 将門軍の強さの秘密 101

第六章 平安時代の国司 105

第七章 奈良、平安時代の呪術

109

第一節 虫を用いた呪術、巫蠱（ふこ）、人形を用いた呪術、厭魅（えんみ）

113

第二節 密教について

120

第三節 陰陽道について

130

第八章 将門に対する評価

140

第一節 江戸時代までの将門の評価

141

第二節 明治以降の将門の評価

146

第九章 将門の生涯

150

第一節 将門の少年時代

151

第二節 京都における将門

153

第三節 一族の争い

159

第四節 小春丸事件 166

第五節 国府襲撃 171

一 武蔵国の紛争 171

二 藤原玄明について 176

三 常陸国府襲撃 180

第六節 最後の決戦 185

一 八千人の兵が集まらなかった理由。 185

二 呪をかけられた将門 190

参考文献 195

第一章 将門の胴塚、首塚について

将門は九四〇年（天慶三年）二月一四日に戦死した。

将門の首は京都に運ばれたが将門の体は将門の死の直後おそらく二月一四日に将門に縁のある者が現在の延命院に埋めた。そしてそこに目立たないように高さ一メートル程度の小さな山を作り古墳のような墓を作った。そして小さいので見失わないように目印として山の上にカヤの木を植えた。これが現在坂東市にある将門の胴塚と云われているものである。

栃木県足利市には将門が討ち取られたとき腹が飛んできたと言われる大原神社・手が飛んできたと言われる大手神社があるがこの胴塚は胴だけ埋めたということではない。首だけ無い将門の遺体を埋めたものである。この地は、相馬御厨（伊勢神宮の荘園）だったことから胴塚は現在まであばかれることは無かったと言われている。

私が初めて延命院に車で行った時近くの交差点の名称が「神田山」であることを見つけ思わず鳥肌が立った。この延命院周辺には今でも神田山という地名がある。神田山と書いて「カドヤマ」と読む。「カドヤマ」とは本当は将門山「マサカドヤマ」と書いて将門を吊って作った山（塚）という意味である。将門の死後、将門の残党狩りが厳しく行われていたので、将門山と称して将門を祀っているとすると将門の一味と見做され逮捕されて処刑されるかもしれない。そこで将門山をマサカドヤマと言わずカドヤマと呼んで字は神田山という当て字にしたのだと思われ

る。将門の時代の地名が現在も残っているのだろう。

将門のゆかりの者たちは将門山を作った後、残党狩りを恐れ主に武蔵国の秩父郡や豊島郡方面に身を隠した。

将門の首は四月二五日京都まで運ばれ晒された。空也上人が将門の首が晒された地に堂を建て手厚く供養した。将門の首は京都で晒し首になった後、将門の縁者が首を桶に入れて同年六月に柴崎村（現東京都大手町）に持ち帰り古代の古墳のような高さ六メートル周囲27メートルの塚を築いた。現在でも港区の増上寺の周辺を芝というが柴崎村とは芝の先にある岬という意味である。将門の首塚は岬の先端に築かれその南側は海であった。徳川家康が江戸に入ってから周辺は埋め立てられ柴崎村は大名屋敷が立ち並ぶこととなった。

今この周辺は神田と呼ばれているが、首塚を造った時本当はこの首塚をマサカドヤマと呼びたいところだったがまだ残党狩りが厳しく行われていたのでここも延命院の胴塚と同じくこの塚をカドヤマと呼んで神田山という字を当てた。そしてこの辺一帯は神田山という名称になりそして長い年月を経て神田だけになり「カンダ」と発音されるようになったのではないだろうか。この高さ六メートルの首塚は一九二三年の関東大震災まで存在していた。

この首塚を作ったときすぐ近くに社を作った。土を築いて首塚を作ったので築土神社なのだ

が始め津久戸明神と呼ばれていた。津久戸明神はいろいろな事情によりその後六回ほど引越した。現在は筑土神社と名前を変え千代田区九段北一丁目にある。ただし引越したのは神社の建物だけであり塚は移動してない。この神社には将門の首を運んだという首桶がありそれが御神体であった。この首桶の中を見ると目が潰れる、と言われ誰も見た者はいないという。この首桶は確かに昭和二十年までは存在していたが戦災で焼失したとされる。

鎌倉幕府成立後の十三世紀半ばに成立されたとされる『平治物語』に将門のことが書かれている。

それによれば「将門の首が晒されているとき藤六という者が「将門は米かみよりきられける俵とうたのはかりごとにて」という歌を詠んだら将門の首が「しい」と笑ったとある。二月に討たれた首が五月三日に笑うとは恐ろしいのだが。

将門には七人の影武者が居りどれが本物の将門であるか分からないのであるが、俵とうたはその中でこめかみが動くのが本物の将門だと知っていたのでそれを狙って矢を放ったという伝説があったのである。米と俵をかけたこの歌を将門が理解して笑ったという話である。

鎌倉時代の一三〇〇年ごろの柴崎村周辺には疫病が蔓延していた。疫病とは大規模な伝染病をいうが奈良平安時代にも大いに流行った。おそらく天然痘ウイルスであろう。

当時疫病は怨霊のせいだと思われていた。そのころ柴崎村にあった将門の首塚は荒れ放題となっておりこれが疫病の原因だと思われていた。そのころ時宗の僧、他阿が通りかかり一三〇七年(徳治二年)将門に「蓮阿弥陀仏」の法名をつけて塚を再興した。その後疫病は治まった。そして近くにあった日輪寺を時宗に改宗し柴崎道場と名づけた。日輪寺柴崎道場は現在台東区浅草3の15の6に存在する。一三〇九年(延慶二年)他阿は近くにあった安房神社の社を将門の霊と合祀して神田明神と名付けた。つまり神田明神は将門が死ぬ以前から存在しており首塚とは直接関係ない。

一三七〇年ごろ成立した『太平記』でも将門の話が出てくる。それによれば将門の首は京都で晒し首になったとき何ヶ月たつても腐らず、毎夜「斬られた私の五体はどこにあるのか、この来い。首をつないでもう一戦しよう」叫び続けたので恐怖しない者はいなかったとある。一四七八年太田道灌が江戸城を築いたとき津久戸明神を守り神として城の北西部分である今の北の丸公園付近に移した。その後徳川家康が江戸に幕府を開くと家康は江戸城を改築するにあたり首塚は今の地に残したが神田明神は江戸城の鬼門にあたる現在の地(東京都千代田区外神田2-16-2)に移された。それらい神田明神は江戸の総鎮守となった。

江戸時代には首塚のある土地は大老や老中を出した酒井家の所有地となった。その時首塚は

将門稲荷社と呼ばれていた。

その後江戸時代にできた『前大平記』には京都で晒された将門の首は空高く舞い上がり故郷を目指して飛び去ったが途中で力尽きて武蔵国柴崎村に落ちたというふうに書かれている。

晒し首が飛んだというのはあり得ない話であるが、飛んでいた首を途中で打ち落としたという話もある。岐阜県大垣市にある御首神社には、東に飛んでいく将門の首を打ち落としたという伝承がある。地に落ちた首を坂東に戻らぬようにその怒りを鎮め霊を慰めるためこの地に神社が創建されたのである。

その後明治新政府になると首塚周辺一帯の土地は大蔵省の所有となった。一九二三年関東大震災が起こり、あたり一面が焼け野原となった。そのため大蔵省は高さ6メートルあった首塚を潰して整地しその跡地に仮庁舎を建てた。その後将門の崇りが頻発した。ときの大蔵大臣、早速せいじ氏が就任三ヶ月で死亡。その後二年間で関係者十数名が急死した。その後、役人の中からけがや病気にかかる人が続出。それもなぜか足に負傷する者が多かったがそれは、将門塚を壊し、その上に庁舎を建てて将門公を足下にした祟りだという噂が流れた。そのため一九二八年（昭和三年）三月二七日午後四時から当時の三土蔵相らが出席して将門の鎮魂祭が大々的にとりおこなわれた。この事實は翌日の読売新聞の朝刊に写真付きで大きく取り上げら